

「進路多様躍進校会議」に全国の70校から130人が集結

進路多様校の躍進こそが日本発展の鍵！ 指導力向上の全国的な研究会を実施

2015年7月、群馬県立高崎東高校において、「第2回 進路多様躍進校会議」が2日間にわたって開かれた。前年度の第1回から規模が拡大し、25都県の70校から130人の教師が参加。基調講演後、3つの分科会に分かれて、自校の取り組みを発表し、様々な指導ノウハウを共有した。主催者である高崎東高校の山口和士校長に、開催を思い立った理由、会の内容、今後の展望、教育の変革期にあつて進路多様校に求められることを聞いた。

課題や悩みを本音で語り合い 同志のネットワークを築く

「進路多様躍進校会議」は、その名の通り、生徒の卒業後の進路が多様な高校の教師が集まり、自校の取り組みを互いに紹介し合うことで指導ノウハウを共有し、各校の指導力向上に資することを目的とした会議です。各校が立ち向かっている課題、教師が抱えている悩みなども本音で語り合い、解決の方策を少しでも見いだすだけでなく、全国の先生方がいつでも相談し合えるネットワークを築きたいと考え、県教育委員会に

も相談の上、勤務校の群馬県立高崎東高校を会場に開催しました。

私がそうした会が必要だと考えたきっかけの1つに、2年半前、本校の校長に着任したことがあります。本校は創立三十二年の地域の中堅進学校です。生徒の卒業後の進路は国公立大進学から就職まで多様で、入学時の学力や意欲、更には保護者の意識や経済状況なども様々ですが、教師がほんの少し導くだけで伸びるだろうと感じる生徒が大勢いました。しかし、平均年齢が若く、進学指導の経験も少ない教師が多かったため、生徒の力を伸ばしたいという意欲があつても、方策にたどり着いていな



群馬県立高崎東高校
校長
山口和士

やまぐち・かずし
教職歴37年。同校に再赴任して3年目。藤岡高校、高崎東高校、富岡高校、高崎高校（進路指導主事などを歴任）、藤岡高校（定）教師、藤岡中央高校（定）教師、前橋東高校教師、伊勢崎高校副校長などを経て、現職。「勝負は今。今日、質問に応えぬ教師は、明日への生徒の信頼を失う」

いという課題が見えました。私は先生方の「熱」に懸け、学校全体として指導力向上に取り組みうと考えました。ただ、研鑽を積もうにも、校内だけでは限界があります。もち

ろん、目の前の生徒の実態を把握して指導することが最も重要ですが、生徒の多様化に対応するには、教師自身の視野を広げる必要があります。そこで考えたのが他校との連携です。

「進路多様躍進校会議」概要

● 概要

国公立大、私立大、短大、専門学校、公務員就職、民間就職など、生徒の卒業後の進路が多様な高校の教師が集まり、自校の進路指導や生徒指導の取り組みを公開し、指導ノウハウの共有、課題認識などの情報交換を目的とした会合。群馬県立高崎東高校を会場とし、年1回、2日間（金曜午後と土曜午前）にわたって実施。北は青森県から南は鹿児島県まで、全国から高校教員が参加。2015年度は25都県にも及んだ。

● 参加者数

2014年度：33校、101人 2015年度：70校、130人

● 2015年度の内容

- ・群馬県立女子大・濱口富士雄学長の基調講演「文系として際立つ群馬県立女子大学」と質疑応答
- ・3つの分科会「難関国公立大学・私立大学指導対策研修」「国公立大学指導対策研修」「医療・看護系進学対策研修」に分かれてワークショップを実施。2日目に全体会でその内容を発表。



*山口和士校長からの提供資料を基に編集部で作成

本校と同じような状況にある高校は県内のみならず全国にあります。本校を開放し、同じように苦悩を抱える全国の進路多様校に呼び掛け、一堂に集まる研究会を開こう。そうすれば、本校の教師も深い学びの種を得られると考えたのです。

進路多様校に活力を生み 高校教育の飛躍につなげたい

本校の課題を出発点にもう1つ考えたのは、進路多様校の躍進こそ、

全国の高校の教育力向上に結び付くのではないかとことです。

普通科を有する高校は、全国に約2600校あり、そのうち「進学校」と呼ばれる高校は約300校、少し幅を広げても500校ほどで、それ以外の約2100校は「進路多様校」と呼ばれる高校です。日本の高校の大半を占める進路多様校の先生方が元気になり、現実を変革したいと思っ

て生徒と向き合うようになれば、日本の高校教育が大きく変わるのではないかと考えたのです。

上層の生徒が国公立大に挑戦する道筋のつくり方、中層の生徒を難関私立大に挑戦させる仕掛け、専門学校を志望する実学志向の生徒に応じた指導の仕方、公務員・民間企業の就職指導の仕方など、その指導経験がある先生方の話を聞き、学び

続けることで、今は経験がない教師でも力が付いていくはず。そうならば、卓越した指導力のある教師がいなくても、学校全体として大きな力を持つことが出来るはず。実際、本校の教師は積極的に参加し、意識改革が進んだ結果、学校全体が大きく変わりました。すると、

国公立大現役合格者が13年度入試で

は15人、14年度は17人、15年度は24人と着実に伸びていったのです。

全国に共通する課題には 国を俯瞰した教育観が必要

当初は5〜6校が集まれば大成功だと思っていました。14年度第1回は、参加校数33校、参加者数101人に及びました。北は青森県から南は宮崎県まで、年齢層も20代〜50代と、まさに多様な教師が集まりました。中には、自費で参加された先生もいました。この会議にそれだけの意義を見いだしてもらえたことをうれしく思い、実際、期待に応えられるだけの活発な意見交換がなされたことに、会の成功を感じました。また、進学校の参加も複数校ありました。東京大や京都大など超難関国立大の合格者が輩出する高校でありながら、専門学校進学などの多様な進路を抱える生徒も出てきたことに対して、危機感を抱いているのだらうと思いました。

そのような手応えを得て、また、参加者から次年度も開催してほしいという声を多くいただいたため、15

年7月に第2回を開催しました。

第2回を第1回以上に有意義な機会とするために考えたのは、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」、いわゆる「新テスト」について、大学から率直な考えを聴く場を設けることです。19年度から順次実施といわれている新テストがどのようなものかは、高校現場の最大の関心事です。この日本全国に共通する教育の課題を考えるためには、学校や県の枠を超えて、日本を俯瞰した教育観が必要になります。だからこそ、全国から教師が集まるこの会議で考へるべき課題だと思いました。

そこで、私は昨年から群馬県内の国公立大、私立大、短大の学長や副学長、理事の方々を訪問し、新テストへの対応、個別学力試験の作問の方向性や体制について尋ねてきました。正直なところ、県内の各大学は対応に迷っているというのが実情だと分かりました。そうした状況においても、大学の考えを高校現場に向かって率直に話そうと言っていた。いた、群馬県立女子大の濱口富士雄学長を第2回の講師に迎えました。

改革期の今こそ、 未来を展望し、攻めの姿勢を

今後、「高大接続改革実行プラン」を軸として教育改革は進んでいきます。かつて、共通一次試験がセンター試験に切り替わった時、傍観していた高校、対策が遅れた高校がその地位を失っていくのを目の当たりにしてきました。それを繰り返さぬために、今から十分に備えておくべきです。最も必要なのは、周到な準備と対策を自校で行おうとする強い意志、攻めの姿勢だと考えます。03年度の学習指導要領改訂時にスクール・アイデンティティ（S I）の重要性が強く訴えられていましたが、同様に変革期を迎える今、再び新たなS Iの確立が重要ではないでしょうか。ただ、改革といっても、自校にとつての不易の部分、改革すべき部分の両方があるはずで、変えていかなければならないとすれば、どのような形態で実践するのか、そのスタンスを明確にして、改革実施年までのタイムテーブルを作ることが、確実な成果に結び付くと考えます。

また、新テストでは合教科・科目型、総合型の問題にも注目が集まりました。教科再編や指導内容の融合、分離などの変化に対応できるように、校内で融合問題や複合型教材を製作し、その方向性の確立にも早期に着手した方がよいはずで、古典を英語で訳して外国に発信する、数学と物理を融合したプリントを作るなど、その検討には時間が掛かると思われる。少しずつでも始めることが重要です。いずれ、新テストの試作問題が発表されます。その時には教科を超えて問題分析をし、指導の可能性を探ることが必要になります。他教科の教科書にも目を通し、生徒が何を学んでいるのかをつかんでおくことが、指導内容の融合への対応策の第一歩となるでしょう。

生徒の学習状況の把握は、中学校、小学校にさかのぼっても行っておきたいことです。未来の高校生の実態をつかんでおかなければ、対策も立てられません。新テストを初めて受ける生徒は今の中学1年生となる予定ですが、保護者は新時代の教育改革を実感として展望できていないようです。そうした保護者に自校の対

策をアピールして、啓発していくことも求められるでしょう。本校はこの課題にも敢然と挑戦します。

全国の先生方に勇気を与え 新たな進路指導の道を拓く

校長となった今も、私は毎朝、校門の前に立ち、生徒に「おはよう」と声を掛けています。また、1年を通じて生徒と面談し、答案を見て弱点を指摘し、個々に合った戦略を授けています。多様校といえど、熱意のある教師と出会い、学びたいと思える学間を見つけることで、生徒の人生が変わる瞬間は無数にあるのです。どのように改革が進んでも、教育の王道、本質は変わらないのです。生徒の現状を分析すると共に、それぞれの教師が抱える課題を整理し、学校の方針として解決する。その際に必要なのが、幅広い視点であり、経験から得られる知恵であり、それらを共有する教師たちの交流です。本校と全国の先生方に勇気をもたらす、新たな進路指導の道を切り拓く場とするため、今後もこの会が発展していくことを願っています。

参加者が語る

進学校こそ進む多様化に対応し 自らの視野を広げることが必要

新潟県立国際情報高校

山崎健太

やまさき・けんた



教職歴12年。同校に赴任して8年目。進路指導主事。「学ぶということは、優れた人格を持つて、他者に貢献すること。そうした生徒を1人でも多く育てたい」

地方の高校で進む ユニバーサル化に危機感

大学ではユニバーサル化が進んでいます。高校でも同様のことがいえます。地方の公立高校は、都市部にある一部の高校を除き、進学校といえども全入に近い状況の高校もあり、多様な生徒を抱えるようになってきました。更に、少子化の影響で学級数が減り、教師数も減っていくことが、今後ますます現実味を帯びていきます。生徒の多様化に今よりも少ない数の教師で対応していくために、1人何役もこなさなければなら

なくなると思います。

本校も旧帝大に現役合格者を出すいわゆる地域の進学校ですが、近年、学力も含めて生徒の多様化が進んできていると感じています。そのため、全国各地の高校の実践例を直接見聞きして、知見を得たいと思います。昨年に続き、今年も本校から私を含めて2人が会議に参加しました。

今年3つの分科会があり、私は「国公立大学指導対策研修」に参加しました。各校が挙げた課題の中に、教師個人の経験値の違いなどが原因で面談内容にばらつきが生じているということがありました。それに対し、ある高校では、卒業時に行う生徒へのアンケートに「先生との面談で一番印象に残ったのは、いつ、どのような場面だったか」という質問を設け、その回答を集約して全校で共有し、以降の学年の面談に役立て

ているとのことでした。自分にはない発想であり、すぐに実践できる工夫を得られるのも、大勢の教師が参加しているこの会ならではのと思っています。

校内だけでなく、

全国に目を向ける必要性を実感

私が他県の先生が集まる研修会に初めて参加したのは3年前、山形県で開催された「環日本海進学ネットワーク」です。その前年に進路指導部に配属になり、学校全体の進路指導について学んでいる時でした。

各県の各地区の進学校が集まり、実践報告や意見交換をする中で、校内だけでなく、全国に向けて意見を発信し、高校教育全体をより良くしようと奮闘する、山口校長のような先生方がいることに衝撃を受けました。そして、多様な視点、幅広い経験、県民性、学校の特性などが入り混じった状況で先生方と意見を交わし、思いを共有し、発展させることが、今後の教育につながると実感しました。学校の伝統、同僚性、県民性に左右され、自校の視点では特別に感じることが、全国では一般的なことも

あります。そうした気付きを得られる場でもありました。最近、高校のスポーツ界では、日本人と外国人の子どもが活躍し話題になっていきます。今後、国策により外国人労働者が増えそうですが、そうならば、親が外国籍という生徒が増え、学力や気質以外の面でも多様化が進んでいくかもしれません。そのことに気付いたのも、他校の先生方との交流があったからだと感じています。

それぞれの教師が県を超えた思いのつながりを大切にして生徒と向き合うことで、生徒は志を持って社会に巣立ち、変化の激しい社会を切り拓き、前に進んでいくことが出来る。そのためにも、教師のネットワークを更に広げていきたいと思っています。



写真 「国公立大学指導対策研修」の分科会の様子。40校の教師が参加。全体で意見を述べ合った後、4つのグループに分かれて、自校の取り組みを報告。取り組みのポイントへの質問や更に良くするアイデアなどが出された。